

2023 年 1 月 21 日

2022 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

子どもへのワクチン接種をためらう親に対する行政保健師の関わり

**The Role of Public Health Nurses in Addressing Parental Vaccine
Hesitancy**

21MN013

木村 颯子

要旨

〔目的〕本研究では、子どもへのワクチン接種をためらう親に対する行政保健師の関わりを記述し、保健師が果たす役割を考察することを目的としている。

〔方法〕行政保健師として3年以上の勤務経験を持ち、母子保健に1年以上携わった経験のある行政保健師6名に半構造化インタビューを実施し、その内容を質的に分析した。

〔結果〕ワクチン接種をためらう親子に対する保健師の具体的な関わりとして、8つのカテゴリと41のサブカテゴリが抽出された。保健師はワクチン未接種の親子に出会った際、まず【接種状況から親子の課題をアセスメントする】ことで養育支援の必要性を判断していた。実際に接種勧奨や養育支援を行うにあたっては【伴走者として親子との関係性を構築する】ことや、【接種をためらう理由を把握し受け止める】ことを通して、保健師の介入が拒否されてしまう事態を回避しながら、エビデンスや親子の生活などの視点に基づいて【接種に関する意思決定に必要な情報を提供する】ように関わっていた。接種に関する親の意思が明らかになっている場合は、【接種しない意思を持って接種していない親子に対し、子どもがより良い環境で育っていけるように支援方策を検討する】、【接種しない意思はないが、接種に至っていない親子に対し、接種に向けた環境を整える】などそれぞれの状況に合わせた関わりが行われていた。なお接種に関する意思は親子を取り巻く環境によって変動する可能性もあることから、親の思いの変化に応じて接種できるよう支援したり、親の養育能力を伸ばしたりするために【親子を継続的に見守る】という関わりも行っていた。またワクチン接種のためらいは複数の要因が影響しており、保健師は【多職種と連携する】ことで親子の抱える複合的な課題にアプローチしていた。

〔結論〕ワクチン接種をためらう親との関わりを踏まえ、保健師の果たす役割として、親が取捨選択する情報の一端を担うこと、親に意思決定に参加している感覚を持たせること、親の意思決定のプロセスは尊重しながら子どもにとっての不利益が最小限になるよう支援すること、親の意思が変動する可能性を見越して関わりを継続し、接種したいと思ったときに接種できるよう支援すること、親子の状況や特性を多職種に伝えることなどが考えられた。